

宮西香穂里著

『沖縄軍人妻の研究』

京都大学学術出版会、2012年、3,600円＋税、311頁

山本めゆ

本書は沖縄に駐留する米軍の軍人と日本人女性との間の婚姻関係と家庭生活に注目、文化人類学の視点から生活者としての彼らの姿を描き出すことを試みている。序章でも述べられている通り、日米安全保障条約に基づいて日本に生活する米軍の軍人と軍属（基地内で雇用されている民間人）、その家族は合わせて10万人を超える。なかでも国土の0.6パーセントに過ぎない沖縄には、陸・海・空・海兵隊の4軍が駐留し、4万人以上の関係者が日々の暮らしを営んでいるという現実がある。しかし沖縄と米軍、沖縄と本土といった非対称なアクターの思惑が絡み合うなか、マスメディアによる報道は「迷惑施設」としての基地と沖縄の犠牲に照準され、沖縄社会の一部をなす彼女／彼らの姿は長らく等閑に付されてきた。また日本のフェミニズム研究においても、軍人の妻といえはかつての「銃後の妻」に、他国の軍人と日本人女性との関係といえは性暴力と性的搾取に関心が集中し、他国の軍人と結婚した女性たちの経験についてはじゅうぶんな注意が払われてこなかった。

著者は本研究にさきがけ、横須賀米海軍基地において軍人と日本人女性の結婚に関する文化人類学的調査を実施、その成果を修士論文にまとめた〔宮西2003〕。その後2004年10月に沖縄の嘉手納町に居を構え、2005年10月から2008年12月までの約3年2ヵ月にわたって海兵隊基地キャンプ・フォスターを拠点として調査を実施した。こうした丹念な調査が高く評価され、本書は第8回女性史学賞を受賞している。

本稿では、本書の内容の紹介を通してその意義を確認した後、最後に評者のコメントを加えたい。

本書はまず8ページのカラーの口絵のなかで、沖縄本島の米軍基地の地図、キャンプ・フォスターの地図、嘉手納飛行場周辺地図や、米海兵隊階級表、米陸軍階級表、米空軍階級表、米海軍階級表などを紹介する。つづく本文は、「はじめに」「おわりに」「沖縄米軍基地関連の用語一覧」「索引」等を除いて序章から終章までの12章で構成されている。

目次	
序章	
第1部 米軍と沖縄社会との接触	
第1章 米海兵隊の世界	
第2章 米軍の家族支援制度	
第3章 米軍基地と地域社会との交流	
第2部 出会い、結婚、葛藤	
第4章 9名の男女の紹介	
第5章 独身時代から出会いまで	
第6章 結婚生活	
第3部 米軍と沖縄社会の間で揺れ動く夫婦	
第7章 米軍基地と地元の反基地運動の狭間にて	
第8章 異動をめぐる夫婦の思い	
第9章 離婚	
第10章 軍人妻たちのネットワーク形成	
終章	

序章は主に先行研究と調査概要の紹介に当てられている。その冒頭では、沖縄に暮らす米軍の軍人・軍属とその家族について、「沖縄では米軍関係者による地域社会への関与も数多く見られ、そこで生じた交流は本土では見られないほど深いものがある。(中略)彼らの多くは、基地の外に住んでおり、われわれと同様ごく一般的な生活を営んでいる」(p.2～3)と記され、彼らを沖縄社会の一員として捉えていくという著者の姿勢が明確にされる。次に先行研究として、軍人妻研究、国際結婚研究、米軍基地の存在を視野に入れた沖縄研究がレビューされている。なかでも本論と深く関わるのは、外国生まれの米軍人妻を軍隊とアメリカ文化の2つの側面において他者化された存在＝「ダブル・アウトサイダー」として論じた Brancaforte [2000] の研究である。著者はそれを批判的に検討しつつ、米軍の軍人と結婚した日本人女性は「軍隊とアメリカとの関係だけではなく、日本社会の中でも困難な状況に立たされている」という認識に基づき、「トリプル・アウトサイダー」という概念を提出する (p.7)。それ以外の先行研究のレビューとしては、宮西 [2004] も参考になるだろう。

著者の本格的な調査は2005年10月に始まり、キャンプ・フォスターのパーソナル・サービス・センター (以下PSC) のフロント・デスクでボランティア活動を行いながら、基地や米軍の軍人・軍属の世界への理解を深めていったという。調査方法は参与観察とフォーマルおよびインフォーマルなインタビュー、写真やビデオによる記録であり、日本語と英語が用いられた。調査協力者は、軍人と結婚した日本人女性が計50名 (沖縄出身者35名、本土出身者15名)、うち46名が結婚継続中、2名が離婚、2名が寡婦である。年齢は25歳以上80歳以下である。日本人女性と結婚した軍人は計22名 (妻は沖縄出身者22名、本土出身者2名)、うち20名が結婚継続中、2名が離婚している。年齢は25歳

以上 90 歳以下である。また人類学的な調査に際しては、米軍基地から調査許可を獲得することが最大の難関であること、同時に本土出身者である著者が沖縄で調査を実施するうえでの困難にも触れられている。

第 1 部では「米軍と沖縄社会との接触」として、基地や軍隊という組織について、沖縄社会との接点にも目配りしながら詳述される。第 1 章「米海兵隊の世界」では、調査地であるキャンプ・フォスターの概要や階級によって秩序づけられた海兵隊員の世界、軍隊における配偶者の位置づけ、諸手当やベテラン（除隊者と退役軍人）への補償、軍属や基地内で就労する日本人従業員の待遇が紹介され、沖縄社会との葛藤も簡潔にまとめられている。「軍人妻の生活」（p. 43～47）の項で示されるのは妻という役割の両義性である。彼女たちは軍の施設利用など生活のさまざまな場面において夫に依存することになるが、同時に夫の不在時にはひとりで家庭を守ることにも期待されている。言い換えれば、「妻は相反する二重の役割を軍から求められている。1つは女性的な受容性や従順さであり、男性に依存的であることと、もう1つはリーダーとして決定力をもち、より男性的に振る舞うこと」（p.44）が要求されているのだ。

第 2 章「米軍の家族支援制度」では、米軍が提供する家族支援制度の内容と特徴について、海兵隊の PSC とファミリー・チーム・ビルディングを中心に論じられる。米軍による家族支援制度は、軍隊の主な構成員が独身男性から既婚者に転換したことや、徴兵制の廃止に伴って多くの志願者を獲得する必要性が生じたために、1980 年代以降に徐々に整備されてきた。なかでも PSC は支援制度において中心的な役割を果たしており、軍人・軍属やその家族を広く対象としている。これに対し海兵隊ファミリー・チーム・ビルディングは、支援対象を軍人家族に特化した組織である。主なプログラムとして、軍人の妻として豊富な経験をもつ「先輩」アメリカ人女性による「後輩」たちへの情報提供、日本人妻のためのオリエンテーション、キー・ボランティアと呼ばれる部隊と家族の間をつなぐ担当官の設置、結婚前セミナー、宗教的強化発達プログラムなどである。

結婚前セミナーは、沖縄の歴史のなかで変遷を遂げてきた。沖縄で初めて米軍の軍人と沖縄の女性との結婚が報じられたのは、1947 年 8 月のことである。その後米軍は 1948 年 4 月に沖縄女性との結婚を禁止したが、両者の接触を禁止することが難しかったためか、4 ヶ月でそれは取り消された。基地内で結婚に関するガイダンスが初めて開催されたのは 1974 年のことで、それらが再編されて正式なセミナーへと発展していった。米軍側からみれば、自国の軍人と「アメリカの食事を料理したことも食べたこともなく、アメリカの家を見たこともない」（p.76）女性との結婚は大きな懸念の対象であり、かつては従軍牧師や弁護士との面会を通して結婚が阻止されることも多々あったという。現在では、国際結婚カップルによるセミナーや日本語セミナーが盛り込まれるなど、支援体制は整備されつつある。これらのセミナーは、カップルへの支援であると同時に、「妻たちを軍隊のコミュニティの中に根付かせ、米軍兵士の妻として責任を持ち自立するように教育する」

（p.83）という役割を担っている。また、著者の参与観察の過程で、支援者であるはずのキー・ボランティアのアメリカ人女性が活動中に日本人女性に対する偏見を露わにしたというエピソードも紹介されているが（p.74）、これは家族支援というジェンダー化された

場においては、「アウトサイダー」である日本人女性たちに対してさらに強い斥力が働くとも見ることができよう。

第3章「米軍基地と地域社会との交流」では、沖縄の地域社会、家族、米軍基地の間の交流が描かれる。米軍基地が周辺地域社会で行う慈善活動はグッド・ネイバー・プログラムと呼ばれ、老人ホームや児童養護施設の訪問、清掃活動など多岐にわたる。また辺野古の住民とキャンプ・シュワブの海兵隊員の間にも継続的な交流関係がある。著者が参与観察を行った辺野古区民運動会に関する記述では、米軍と沖縄社会という両者にとって、この地が新しい出会いを創出していることが示唆される。しかしながらこうした活動は、沖縄の地域社会からは「米軍の駐留を『美化』しようとする幼稚な茶番劇」(p.92)などと批判されることもある。著者は米軍基地と駐留国との間の政治的なかけひきを認めつつ、「米軍関係者と基地所在地に住む住民たちは、個人としてお互いに知り合う機会を経て、理解を深めていることも事実である」(p.104)と締めくくっている。

つづく第2部は「出会い、結婚、葛藤」と題し、インタビュー調査をもとに、米軍の軍人と日本人女性との交際、結婚、離婚などの生活が記述される。第4章「9名の男女の紹介」は、第2部を通して中心的に描かれる日本人女性4名と米軍関係者の男性5名の人物像や経歴を紹介する。

第5章「独身時代から出会いまで」では、インタビュー・データの検討を通して、調査協力者から語られた彼らのなれそめや互いに惹かれた理由が整理されている。女性側が相手に惹かれた理由としては「沖縄文化への批判・拒絶」「沖縄・日本人男性への批判」「『ハーフ』の子供」が、男性側の理由としては「日本人女性像の魅力」「アメリカ人女性への嫌悪感と日本人女性像の称賛」が語られるという (p.158～166)。

第6章「結婚生活」では、沖縄での家族や親族とのつきあい、軍隊とのつきあい、子供の教育、さらに性生活に踏み込んだ男性たちの語りも紹介されている。家族や親族関係に関する描写では、実家との結びつきが強く、出産後は子供中心の生活へと移行しがちな沖縄の女性たちと、カップル単位の関係を重視するアメリカ人男性たちとの葛藤が浮かび上がる。また子供の教育をめぐる、夫婦は多くの悩みを抱えているという。男性たちはわが子が英語話者になることを強く望むため国防総省が運営する基地内の学校への進学を希望するが、この学校は現役軍人の子であれば授業料が免除されるのに対し、親が除隊や退役している場合は高額な授業料を負担しなければならない。軍属の子も基地内の学校に通学することはできるものの、あくまで現役の軍人の子が優先される。日本語が堪能でない男性たちにとって、わが子が英語を習得できないということは子との会話を失うことを意味する。子供の教育をめぐるこうしたリアリティは、基地の内側の事情に馴染みのない大半の日本人にとっては、非常に新鮮な内容だろう。

第3部では「米軍と沖縄社会の間で揺れ動く夫婦」として、彼らの夫婦関係が米軍と沖縄社会の葛藤とともに論じられる。第7章「米軍基地と地元の反基地運動との狭間にて」では、沖縄における反基地運動や2004年に発生した米海兵隊ヘリコプター墜落事故について、夫婦双方からの意見が提示される。男性たちからは、「日本人とアメリカ人は沖縄の人を殺した。義理の祖父も、沖縄戦で亡くなった。現在でも沖縄の人は痛めつけられて

いる。(中略) 沖縄の人は抗議運動をする権利がある」(p.230) と発言するなど、基地問題に関連して沖縄に同情的な意見をもったり、妻の基地反対運動を尊重したりするような態度が示される場合もある。

第8章「異動をめぐる夫婦の思い——沖縄における退役軍人の生活を中心に」では、軍隊にはつきものの異動をめぐる夫婦双方の思いが浮き彫りになる。沖縄の女性は一般的に、夫が軍人として最低20年間勤め、退役後には沖縄の基地内で軍属として働き、沖縄で退職することを望むという。退役年齢は平均40歳前後と若く、就学年齢の子供をもつ男性も多いため、退役後には再就職の問題が浮上する。興味深いことに、基地内の雇用をめぐっては、除隊・退役軍人は軍人の妻たちと競合関係にあるという。というのも、基地内の就職には日米地位協定上の身分が求められるが、軍人の妻たちがそれを与えられているのに対し、除隊・退役した者はすでに喪失しているため、妻たちのほうが有利な立場にあるのだ。第6章でも言及された通り、子供の教育の問題も含め、基地内での就職は単なる収入源の確保以上の意味をもつ。ここからは、居住地や子供の教育などの家庭内での選択が、米軍の諸制度との相互作用によって水路づけられていることを読み取ることができる。

第9章「離婚」では、離婚をめぐる諸問題や双方の思いを掬い上げる。一般に、米軍の軍人とアジア人女性という取り合わせは離婚率の高さで知られているという。こうした夫婦関係について、著者はこれまでほとんど耳を傾けられてこなかった男性側からの声を紹介する。たとえば結婚生活に対して不満を抱えた場合、沖縄の女性は家族や友人に相談するため地元コミュニティとのつながりがさらに強化され、その結果男性は孤立しやすくなる。米軍内には夫婦間の問題に対処するための支援制度もあるが、言語の障壁もあって日本人女性たちはそれらの利用に積極的ではないという。

第10章「軍人妻たちのネットワーク形成」では、妻たちが有する社会的ネットワークとして、「将校の妻の会」「日本人妻の会」や、創価学会インターナショナル(以下SGI)が紹介される。SGIは世界各地に支部をもつため、夫の異動に帯同する妻にとっては、見知らぬ地に転居しても日本語で支援を受けられるという利点がある。したがって日本人の妻にとってのSGIは、「軍隊と地域社会という枠組みを揺るがすような新たな人間関係を創出できる場」(p.279)であると著者は評価する。

これらの議論を受けて終章では、米軍基地の存在を視野に入れた沖縄研究、国際結婚研究、軍人妻研究の3領域について、本研究がもたらした新たな知見と意義を簡潔に整理している。さらに人類学との関連として、多くの人類学的研究が周縁的なものを対象としてきたために、「日本人にとっては他者ではあるが、弱者ではない存在」(p.284)である米軍やその関係者には光が当てられてこなかったと指摘する。そして、軍人との結婚により「裏切り者」として疎外されてきた女性たちの姿を地域社会の文脈を踏まえて考察することこそ、現代社会における新たな人類学を模索する実践であるとして、これを結語としている。

ここまで振り返った通り、本書はタイトルこそ「軍人妻の研究」と掲げているが、基地を内包する地域社会の研究としても高く評価されるべき労作である。その意義と魅力をま

とめるとすれば、まず、第1章から第2章にかけて提示される米軍や海兵隊の組織、基地内の雇用や家族支援制度の成り立ちなどに関する詳細なデータは圧巻の一言である。とりわけ家族支援制度については、歴史的な背景に加え、著者がボランティア活動を行いながら参与観察を行った記録が盛り込まれ、本書の大きな魅力のひとつとなっている。また、第2部と第3部を通して、著者はインタビュー・データの検討から、沖縄という地域の文脈を重視しながら地元出身の妻たちの日常的実践に迫っていく。女性が結婚後も実家や出身コミュニティと強い結びつきを維持するという習慣が結婚生活にも影響を及ぼし、ときにアメリカ人の夫を疎外することもあるという知見は、横須賀基地での先行調査の経験も生かされており、複数の調査地をもった人類学者ゆえの成果といつてよいだろう。

加えて、沖縄における米軍関係者と基地問題との距離感も、興味が尽きない点である。たとえば政治学者のエンローは在外米軍基地に妻たちについて、米軍関係者ゆえのさまざまな特権に満足し、軍隊の敵を彼女たち自身の敵のようにみなすなど軍隊の考え方に適応していると論じている (p.44)。しかし本書に登場する妻たちのなかには、基地への反対をはっきり表明する女性がいる。もしこれが例外的なことであるとすれば、それは彼女たちが駐留地における現地出身の妻だからではないか。さらに、本書に登場する男性たちのなかからは、反基地運動に共感的な意見が示されることさえある。インタビューアである著者が日本人であるという点を割り引いたとしても、本研究で描出される人びとは、軍隊関係者でありながらときに軍隊や基地を相対化し、独特の距離感を維持しながらそこに参与している。これは異なる背景をもった人びとの交差が、たとえその出会いの起点が支配—被支配の関係によるものだとしても新たな可能性を創出しうることを示唆しており、この点も本書の意義として強調しておきたい。

最後に、評者のコメントを短く述べておく。まず読み手が留意すべきこととして、本書では人種に関連する記述が回避されている。本文では触れられていないが、序章の調査協力者の一覧 (p.16～20) が示すように、そこに現れている人びとの圧倒的多数が、「白人」と婚姻経験のある日本人女性と「白人」のアメリカ人である。著者の調査依頼に応答した協力者になぜこのような人種的な偏りが現れたのか——本書では「白人」「アフリカン・アメリカン」「ヒスパニック」などのカテゴリーについて、「エスニシティ」という語が用いられているが——については考察されていないが、読者はこれを念頭に置きながら読み進める必要があるだろう。

このことは、「ハーフ」の子供に関する記述とも関係する。第5章では日本人女性が結婚を望んだ理由として、「ハーフ」の子供への期待が語られているが、このときの「ハーフ」とはどのような子供たちなのか。沖縄では「アメラジアン」の子供たちが直面する困難がしばしば指摘されるが、こうした問題と女性たちの願望の齟齬についても触れられていない。関係者への配慮を優先しつつ、いくらかの言及があれば、沖縄研究やエスニシティ研究などへの貢献もより大きなものになったのではないだろうか。

また評者からのリクエストだが、本研究は在沖米軍の男性に着目した移民研究としても論じることができるように思われる。たとえば古典的な国際移動研究において軍関係者は、移動性の高さの特権性を特徴とし、ホスト社会とは隔絶された「expatriate bubble」の

なかで暮らす人びととして、定住指向の移民とは区別される [Cohen 1977]。これを敷衍するなら、本書で描かれている男性たちは、赴任先の地で家族形成をしたことで意図せざる結果として定住者となっていく移民であり、次第に特権性を喪失しつつも、かつて帰属していた組織やホスト社会との相互作用のなかで人生の岐路を修正しながら生きていく少数者である。このような観点から、基地との距離を戦略的に利用していく彼らの日常的実践についての研究も可能なのではないか。

現代の日本では多くの報道において基地は招かれざる存在として描かれるが、基地やその関係者をそこにあるべきではないものとして捨象してしまうなら、「ありえたはずの本来の沖縄」の空想に終始することにもなりかねない。さらには宮地尚子 [2008] が指摘するように、性愛的な関係には社会的な接点が乏しいはずの人びとの間に予想外のつながりを生成するような攪乱性、転覆性といった側面があるのだとすれば、軍人と駐留先の女性たちの関係が相互理解や平和の維持に寄与する可能性も残されているはずだ。

日本各地の基地問題は、われわれにとって今後も大きな課題であり続ける。基地やその関係者の暮らしを内在的に把握し、基地を抱え込んだ地域そのものに肉薄する著者の仕事は、各地で大きな関心をもって迎えられるに違いない。さらなる成果を心待ちにしたい。

<参考文献>

Brancaforte, Daniela Beatrix Maria 2000 *Camouflaged Identities and Army Wives: Narratives of Self and Place on the Margins of the U.S. Military Family*, Ph.D. dissertation submitted to Princeton University.

Cohen, Erik 1977 Expatriate Communities, *Current Sociology* 24: 5-90.

宮地尚子 2008 「性暴力と性的支配」宮地尚子編著『性的支配と歴史——植民地主義から民族浄化まで』大月書店: 17-63。

宮西香穂里 2003 『ダブル・アウトサイダーを生きる——横須賀米海軍男性と結婚した日本人妻たちの生活誌とネットワーク形成』京都大学大学院人間・環境学研究科（修士論文）。

——— 2004 「軍隊は彼女の家族なのか？——米軍人妻の実用的、制度的、生活誌的研究をめぐる」『人文学報』90:23-77。